

## 巻頭言

## イノベーションとビジネスモデル

平野 正雄

日本ビジネスモデル学会 会長

“The future is faster than you think.” 直訳すれば「未来は想像よりも速い」、すなわち技術の進化は加速しており、我々の想像を超える未来が実現されようとしている、ということです。これはピーター・ディアマンディスとスティーブン・コトラーの新著（邦題『2030年:すべてが「加速」する世界に備えよ』NewsPicks パブリッシング）のタイトルです。彼らはイノベーションが多くの社会問題を解決すると考えるテクノロジー楽観主義者です。確かに過去100年に人類の寿命は倍に伸び、インフレ調整後の所得は3倍に増え、食品の価格や移動の費用は10分の1になり、コミュニケーションコストはほとんどなくなりました。もちろんこれらの劇的な改善は技術革新のみで実現されたものではありませんが、イノベーションが決定的な役割を果たしたことは確かです。そして現在、2021年において技術革新の速度は増しており、これから100年で人類は2万年分の進化をすると言われていています。2万年前と言えば世界はまだ氷に閉ざされており、人類はまだマンモスを追い回していました。このような速度での進化を想像できるでしょうか。

少し強引ですが、このようなアナロジーで考えるとどうでしょう。世界はやがて1万年前になると氷河期を抜けだして、温暖化の中で人類も農耕文化へと進化していきます。そして、その後の長い時間をかけて人類が文明を作り上げてきた結果、今日私たちは人為的な地球温暖化による深刻な気候温暖化問題に見舞われています。ちなみに、このような人の営みが地球の地質や生態系を変えてしまった時代を地質区分と捉えて、<sup>アントロポセン</sup>人新世と呼ぶことがあります。これに対して環境問題の克服が国際的な共通アジェンダとなり、日本も含めて多くの国々が2050年までの<sup>カーボンニュートラル</sup>脱炭素社会の実現にコミットしています。つまり大げさに言えば、1年以上に及んで堆積した地質学的問題を今後30年間で技術革新により解決しようとしているのです。その原動力となっているのはAIやクラウドなどのコンピューティング技術の革新が通信技術、材料開発、センサー、ロボティクス、生物化学の技術革新を加速するイノベーションの相乗効果です。むしろ、その範囲はエネルギーに限らず、製造、運輸交通、医療、金融、農業、教育、エンタメなどあらゆる範囲に及んで同時並行的にイノベーションが加速する時代にいま私たちはいるのです。

一方で技術革新がもたらす弊害や外部不経済、あるいはセキュリティや倫理問題には常に目を向けなければなりません。さらには、このようなネガティブな諸問題の克服を含む、より良き社会の実現に向けた新技術の社会実装の実現が重要です。実はビジネスモデルとは、イノベーションの社会実装の実現

方法とも言えるのです。従って、この定義によればビジネスモデルが扱う範囲は、単にいかにか稼ぐのかという経済性の問題だけでなく、技術の社会実装を実現するための制度設計、ユーザ教育、ファイナシング、そしてビジョンとコミュニケーションなど広範なものとなります。

私もテクノロジー楽観主義者です。乗数的にイノベーションが加速する時代にあって、いまの私たちの想像を超える世界が形成されていくと信じています。しかし、そのためには次々と生まれる革新的技術に対する社会や人々の適応力が問われています。つまりは、技術革新を使いこなすためのビジネスモデルの革新も強く求められているのです。そのために当学会も引き続き広範なビジネスモデル上の課題に向かい合って、イノベーションの社会実装の進め方を探索していきたいと思えます。

日本ビジネスモデル学会 会長 平野 正雄